

モンスター娘に襲われる A S M R ～アルラウネのラウニカ編～

(Attacked by a Monster Girl ASMR -Alraune Girl Launica Version -)

あらすじ

冒険者が訪れる大樹海。そこは樹海というだけあり、多くの植物が存在する。中には植物の形をした魔物も……。特にアルラウネは普段、周囲の森に溶け込んでいるが、男性が近くと体液を求めて活動を始める魔物である。アルラウネの個体ラウニカは、日照不足の場所で育ったために、陰気な性格。しかし日光を補うために、通りがかった冒険者から栄養分として精液を奪取する方向に進化していた。養分を得たラウニカは、さらに淫乱な本性をあらわにして、最終的には冒険者自身を『養分』とするのだった。

登場キャラ

アルラウネのラウニカ：樹海に生息するアルラウネ。光合成と地面からの養分で生きていくアルラウネだが、日光が得られず暗くて陰気な性格になってしまった。養分を補うために、人間から精液を搾り取ったり、直接栄養分とする方向に進化していった。花粉や香りで獲物となる人間を操る術を持つ。日光のある場所で美しい花を咲かせる他のアルラウネにコンプレックスを持っているので、卑屈な性格ではあるが、褒められると弱いチョロいところも。ただし人間のことは養分を出してくれる存在としか思っていない。

少年冒険者：貴重な薬を作るために樹海を訪れた薬学士の少年。薬の材料となる植物を探しにきたところ、ラウニカに目をつけられ、ラウニカの花と引き換えに精液の提供を半ば強制的に要求される。その結果、ラウニカの花粉を浴びて、精液を絞りつくされてしまう。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出会い ～日陰の植物娘～

ラウニカ「あ、あのう……」

ラウニカ「えと……ちょっと、いいですか？」

ラウニカ「ううう……聞こえてないのかな。もしかして、私、無視されてる？」

ラウニカ「あ、あ、行っちゃう……もっとおっきな声出さなきゃ」

ラウニカ「すうううううう」

ラウニカ「あのっ！」

ラウニカ「あ、そうです。こっちは、こっち……へ、へ、どうも。んふ」

ラウニカ「あ、私、アルラウネのラウニカっていいます」

ラウニカ「えっとお……あの、急にすみません」

ラウニカ「な、なんか最近この辺り、暗くないですか？ ねえ？」

ラウニカ「え？ あっ、そそそそうですよね。初めて来たんですもんね。知らないですよ
……あはは」

ラウニカ「いやあ……え？ そう！ そうなんです。おっしゃる通り！ 周りの葉っぱが
すごくて。日光がさえぎられちゃって……」

ラウニカ「あ、で、でもっ。そこに気づくなんてさすが人間さんですね！ もしかして植物
に詳しいんですか？ んふふふ」

ラウニカ「おかげで私、太陽の光を浴びられなくて……そこで、あの……もしよかったら
……なんですけどお」

ラウニカ「周りの葉っぱを切り落としたりして、日当たりをよくしてもらえませんか？」

ラウニカ「あ、もちろん、ただでとは言いませんよ？ 私の葉っぱやお花、いいお薬の材料
になると思いますよお」

ラウニカ「人間さんの世界では手に入らないような、それはそれは強力な……ふひ、ふひひ
ひ……」

ラウニカ「え、い、いいんですか？ やったあ……じゃあ、早速お願いしますっ」

ラウニカ「お、おお～～。ふおおおお～！ やったあ」

ラウニカ「ああ……空が見える……太陽が見えるう……んふう」

ラウニカ「ふひひ、私なんかのためにい……ありがとうございますう……へ、へ、へ」

ラウニカ「あ、待って！ 行かないで！」

ラウニカ「すすすいませんっ！ 止めようとして、慌ててツルで拘束してしまいました」

ラウニカ「でもでも、あのっ……もうひとつ、追加のお願いが……」

ラウニカ「その……えっと、ですね。お願いというのは、その……」

ラウニカ「ん、んふ……なんて言ったらいいか、ううん……え、へ、うえへ」

ラウニカ「その、ですね？ 日光で栄養を生成するまで時間がかかってしまうので……その……」

ラウニカ「え、ええっと……あなたも養分にしたいなって……えへっ」

ラウニカ「あ、大丈夫です大丈夫です。暴れないで！ 殺しません！ 殺しませんから」

ラウニカ「ちょおっと……その……えっと……あなたの……んふ、んふ、うえへ」

ラウニカ「あなたの精液をいただくだけなので」

ラウニカ「へ……へ……うえへ……ふひっ、ふひひっ」

ラウニカ「そんなに踏ん張って抵抗しないでくださいよお」

ラウニカ「しょ～がない。引きずってでも、こっちに来てもらいますからね」

ラウニカ「さあ……こちらへどうぞ、人間さん」

ラウニカ「よいしょ……よいしょ……」

2. ツル拘束耳舐め ～耳の中を媚薬の蜜と花粉でいっぱい～

ラウニカ「さあ……もっと私の近くへ……へ、へ、ふへ」

ラウニカ「ああっ、ダメですう。暴れないでください。もっとキツくツルで拘束しますよっ？」

ラウニカ「んふ、んふ……このまま絞め殺しちゃわないように気を付けなと……いひひ」

ラウニカ「……あ、おとなしくしてくれますか？ ならよかったです。いい子いい子……えへ。じゃ、準備しますう」

ラウニカ「じゅるり」

ラウニカ「す、すみませんねえ、日光が十分なら、こんなことする必要も無いんですがあ」

ラウニカ「ここは日当たりが悪くて……私は人間さんから栄養をいただかないと、生きていけないんですう」

ラウニカ「まあ……そのお……私なんかは相手ではイヤかもですがあ……それなりに気持ちよくしてあげますので……うえひひひ」

ラウニカ「私、全身から蜜や花粉を出せるんですけどお……」

ラウニカ「この蜜や花粉には、とっても強力な媚薬効果があるのでえ……ふひひっ」

ラウニカ「おちんぽおっきくさせて、気持ちよお～く射精できますからねえ……んふんふ」

ラウニカ「まずは身体を震わせて……この辺り一帯に花粉を撒き散らしてしまいますね」

ラウニカ「邪魔者が入ってこれないように……うえへへ」

ラウニカ「次は媚薬効果たっぷりの蜜を……どこから出してみせますかね？ どこでもいいんですけどお……」

ラウニカ「やっぱり、この柔らかい舌からがいいですかね？」

ラウニカ「呼吸をする度に私の花粉を吸いこんで……」

ラウニカ「耳の穴からは、私の蜜を染み込ませてあげますう」

ラウニカ「じゃあ、いきますよお？」

ラウニカ「まずは耳たぶから……ちゅっ」

ラウニカ「ん、ちゅっ……ちゅっ……はふう。あ……ちゅっ、ちゅうう……ん」

ラウニカ「ん……ああ～……。はむ、んむんむ。はあ……む、はんむ、んむ……んふう、んふう」

ラウニカ「やわらくて、でも芯には少し固いコリコリした感触があって……楽しい、です」

ラウニカ「は……あ、んむ、んむ。んはあ、はうむ……」

ラウニカ「花粉もたっぷり吹きかけて……」

ラウニカ「ふうふうふう～」

ラウニカ「へ、へ、ふへへえ……えるお……えろお～ん、えれおお～ん」

ラウニカ「えろえろえろ……ん、ろるろるろる……んはあ。んあ……えれえれえれ……」

ラウニカ「わあ……人間さんの耳、赤くなってきましたよお」

ラウニカ「それに、熱い……んふ。えろお～……ん、んちゅう……っはふう～」

ラウニカ「はあ……はあ……ん。えろ、えろ、んむう」

ラウニカ「人間さんの耳から私の蜜が垂れてますう」

ラウニカ「もったいないですねえ？　ちゃあんと、耳の中まで、奥まで入れないと」

ラウニカ「耳の穴の中……いきますよ？　うえへへ」

ラウニカ「んはあああ……じゅるっ……じゅぼ、じゅるるるる」

ラウニカ「ん、んふう……ぢゅ……ぢゅ……ぢゅ、はあっ、んふ……ぢゅうう」

ラウニカ「じゅぼっ、じゅぶるるる……はふう……じゅぼっ、じゅぶるるる……はっ、んっ
……はあ、はあ……ん」

ラウニカ「じゅぶる、じゅるるる、じゅる……れろお、じゅるり……はあ……うえひひ」

ラウニカ「私の蜜をい～っばい流し込んで」

ラウニカ「じゅる、ぬじゅる、んじゅうる……じゅ、じゅぶ、じゅぶ……じゅるるるるる」

ラウニカ「吸って、また流し込んで」

ラウニカ「ぢう、ぢうううう……ん、はっ、ふはあ……はんむ……ぢゅううううっ」

ラウニカ「はうあ……え、えはあ……えろお、えろお……じゅぼ、じゅぼ、じゅぼ……」

ラウニカ「はわあ……大変です。人間さんの耳の中、蜜と花粉でいっぱいですねえ」

ラウニカ「興奮して呼吸が荒くなってますよお？」

ラウニカ「んふ、んふふ……私の花粉、いっぱい吸いこんじゃってますねえ」

ラウニカ「頭がぼんやりして夢見心地ですかあ？」

ラウニカ「いいんですよ、目をつぶって、耳を舐められる感覚だけに集中してください」

ラウニカ「これから反対の耳も舐めますね……うえひっ」

ラウニカ「んふ……んふ……」

ラウニカ「ふうふうふう～」

ラウニカ「敏感になってますね、人間さん」

ラウニカ「ちゅっ……むふ。ちゅっ、ちゅっ……はふう……ん。ちゅっ……えへえへえ」

ラウニカ「私なんかの耳舐めでもお……興奮してきたでしょお？ ……へ、へ、へ」

ラウニカ「はあ～……ん、はんむっ……ふひひ。んむっ、あんむ……はむ……んんっ」

ラウニカ「ふうう、ふうう……んんう……すううう……えええろおおお」

ラウニカ「えろお、えろお……はああああんっ。んふ、えろえろえろ。んちゅっ」

ラウニカ「こっちの耳も、たっぷりの蜜でとろけさせてあげますう」

ラウニカ「えろお……えろお……私の舌が、人間さんの耳の穴に入っちゃいますよお」

ラウニカ「んはっ……じゅろおっ……じゅろおおおっ」

ラウニカ「じゅぶ、ぢゅぶうう……はふ、んぬえろお……ろろろろ、あんぢゅゅゆる」

ラウニカ「えは……んむあうふ……ふううう、ん……ぢうううう……んふ、んふ」

ラウニカ「へあ……んぬりゅ、うう……ぢるる、じゅぼっ、じゅぼっ……っはあっ」

ラウニカ「んはあああ……え、え、ろるるるるうううう……ん、はあ……じゅるらあ、じゅるらあ……」

ラウニカ「反対の耳も同時に責めてほしいですかあ？」

ラウニカ「じゃあ……この新芽を使って、耳の中かき回してあげます」

ラウニカ「芽吹いたばかりの柔らかい葉っぱなので、耳の中が傷ついたりはしませんからねえ」

ラウニカ「こっちの耳は、蜜がたっぷりの私の舌で……」

ラウニカ「じゅぼっ、じゅぼおっ……じゅるるる。えはあ……はふ、んん……えろろろろろろおおお」

ラウニカ「じゅるろっ、じゅるろろお……はあ、はあ……じゅるじゅる……んちゅう」

ラウニカ「へ、へ……激しすぎですかあ？ 頭おかしくなっちゃいそ？ んふー」

ラウニカ「んなあう、んにゅ……はんむ……ちゅろろ、あんんちゅ、ううん」

ラウニカ「へあ、はあ……じゅぼ、ぢゅうぼっ、じゅっるるるるううう」

ラウニカ「んんっ、ふう……じよる、じよる、ぢううううるるるる……っはあっ、ふう、ふう、あんむ……ぬぢうるる、じゅぼるぼるぼる」

ラウニカ「はあ……はあ……はあ……」

ラウニカ「うえへへ……人間さん、興奮してる……やったあ」

ラウニカ「うれしい……うれしい……へ、へ、へひっ」

ラウニカ「私も楽しくなってきちゃったから……」

ラウニカ「もっと敏感なところ、舐めさせてくださあい」

3. 蜜でぬるぬるフェラ ～媚薬の効能で特濃精液～

ラウニカ「人間さん、人間さん、私うれしいですう」

ラウニカ「媚薬効果のある花粉や蜜を使ったとはいえ、私なんかで興奮してくれるなんて…
…」

ラウニカ「人間さんの下半身、大変なことになってますよ？ へ、へ、うえひっ」

ラウニカ「お洋服、脱がしちゃいますねえ」

ラウニカ「ん……？ おほっ……ちっちゃい人間さんでしたが、おちんぽは元気ですね……」

ラウニカ「すん……すん……ううん、くっさあい……樹海をたくさん歩いて汗で蒸れた匂
い……栄養の詰まってそうな匂い……んふふ」

ラウニカ「人間さんの老廃物はアルラウネにとって最高の肥料ですからあ」

ラウニカ「擦って……舐めて……吸って……たっぷり栄養をごちそうになりますう」

ラウニカ「じゃあ早速……このラウニカのおクチで」

ラウニカ「もちろん蜜はたっぷり出しますから、ぬるぬるですよお……ふひひ」

ラウニカ「先っちょに……ちゅっ。うえへっ。反応した。へ、へ……ちゅっ。うえへへっ」

ラウニカ「敏感でいいおちんぽです。ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ」

ラウニカ「んふふ……うまくできるか分からないけど、痛かったら教えてくださいね」

ラウニカ「固くなったおちんぽの根本……あはあ、立派ですう……ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ
……蜜たっぷりの舌で舐め上げて……」

ラウニカ「えろお～～、えろお～～……んふふ……この筋張った部分、気持ちいいんです
か？」

ラウニカ「えろえろえろ、ちゅっ。ぬえろ、ぬえろ、ぬえろ……れろれろれろお」

ラウニカ「はふう……玉の入った袋の方も……はむ、はむ、はむはむ……んふう、ほふう」

ラウニカ「えろえろ……ほんむ、えるお……んちゅ……ほふう……は、はあ……んちゅ、え
ろえろえろ」

ラウニカ「痛くないですか？ 気持ちいいですか？」

ラウニカ「へ、へ……おちんぽ脈打ってます。どく、どく、どく……って。くふふ……気持
ちいいってことでいいですね？ うえへ」

ラウニカ「えええろおお……はふ……ぬええろおお……。根本はとってもかたいのに」

ラウニカ「ちゅっ……ん、えろえろ……はふう。先端は膨れて弾力がある」

ラウニカ「ちゅ、ちゅ……れろれろお……私の蜜に濡れて艶々です」

ラウニカ「本当におっきいですね。人間さんのおちんぽ。うえへ……私のおクチに入るか
な？」

ラウニカ「えと……く、啞えてみてもいいですか？ えへ」

ラウニカ「んあぁ……あんむ」

ラウニカ「おほ、むふー、むふー……おんむ、んもんも……んぱはっ」

ラウニカ「えへへ……アルラウネのおクチは物を食べるために付いてるわけじゃないので、小さいんですよ」

ラウニカ「このおクチはぁ、おちんぽから精液を搾り取るためだけ……」

ラウニカ「おちんぽ気持ち良くするためだけについてるんですう」

ラウニカ「ナカはあったかくて、舌はやわらかくて」

ラウニカ「この快感を味わったら、もう他の穴では満足できなくなっちゃうかもしれませんね。ふひひっ」

ラウニカ「はぁあんむ……んぬる、んぬる……ふごおい……ほふ、おふ……んもんもんも」

ラウニカ「ん……ぶはっ……もっと蜜を出してぬるぬるに……」

ラウニカ「あんむ……じゅるう……じゅるう……じゅるう……んはっ、はーっ、はーっ、はーっ」

ラウニカ「はううむ……じゅぼっ、んじゅるるる……ちう、ん、んふ、んふー、んふー」

ラウニカ「ちううううう……ん、ぱっっ……はふっ。えへへ……ちょっと苦しい、けど、もっと……もつとする」

ラウニカ「あううむ……じゅぼるっ、じゅるんびゅ、ぐっぽ、ぐっぽ、ぐっぽ、ぐっぽ、ぐっぽ」

ラウニカ「んふー、んふー、んふー……おろろるる、ぬりゆりゆりゅう……んぐっ、おふ」

ラウニカ「私の口の中、人間さんのおちんぽでいっぱいですう……」

ラウニカ「はぁ、はぁ、はぁ……もうちょっと、奥まで、入れてみようかな……へ、へ、へ」

ラウニカ「んご……おご、ん、ご、おご……んん、んぐっ」

ラウニカ「はふ……はぁ、はぁ、すごいです。喉の奥まで届いて……」

ラウニカ「おぁ、あんご、ほおごお……ほごおお、ん、ん、んふー、んふー、んふー」

ラウニカ「えお、おおおお……ん、ぢゅるるるうる……ん、っぱはあっ！ はぁ、はぁ、はぁ」

ラウニカ「はぁ……はぁ……ん、んん。はふう、喉の奥でえ、おちんぽの先が締め付けられて、気持ちいいですか？」

ラウニカ「んふふふ……もつとします？ もつとされたいですか？」

ラウニカ「へ、へ、えへ……いいですよ……んふ」

ラウニカ「あおおおん、んごっ……ご、おごお……ん、ん。ほぁ、ほぁ、んぐうううう」

ラウニカ「あへあ……じゅるっ、じゅるるるるんっ……んっ、おぶっ」
ラウニカ「え？ もう出ちゃいそうですか？ ええ……もう？」
ラウニカ「わ、私としては……も、もうちょっと楽しみたいなーって。うえへ」
ラウニカ「そうだ、そしたら……私のツルでえ……袋の付け根を、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅーって」

ラウニカ「こうして縛っちゃえば、もうちょっと我慢できますよね？」
ラウニカ「出したくても出せない精液がいっぱい溜まっていて……どんどん濃くなっていて……」
ラウニカ「特濃の精液ができるかなーって」
ラウニカ「おいしくて栄養満点の精液を出すためです。が、がんばってください！」

ラウニカ「では、いきますっ」
ラウニカ「んああああんむ。ぞるるるる、じゅろろろろっ」
ラウニカ「はあーっ、はあーっ、ん、あん……るろろろろ、じゅぶ、じゅぶ、るろろろろ、じゅぶ、じゅぶ」
ラウニカ「はあ、はあ、おちんぽ、真っ赤になって膨れてますう……ん、んんんう」
ラウニカ「あんむ……おん、んにゅ、ぬゅ、による、んぐっ……じよるじよるうう」

ラウニカ「は、はふ……うえひひ……おちんぽ暴れてますね……ん、んっ、ちゅぶ」
ラウニカ「ぢうううう……んぷはっ。ぢうううう……んばはあっ……はあ、はふ……んう。えろえろるろろろろ」
ラウニカ「はんむ、んむ、んむ……じゅぼお、じゅ、じゅ、ぢゅんぽあ」

ラウニカ「さすがに限界ですかあ？ んふ……じゅぶ、じゅぶ、もう無理？」
ラウニカ「じゃあ……いいですよ？ 出しても」
ラウニカ「じゅぶっ、じゅるる、じゅぶぶっ！ 縛ってたツルもほどいてあげるの」

ラウニカ「えあ……ほら、アルラウネの口に、いーっぱい出してください」
ラウニカ「じゅぶっ、じゅぶぶっ……濃い精液……たくさん……じゅぶっ、じよるるるる」
ラウニカ「どうぞお……んはあ、思いっきり……」
ラウニカ「もう……我慢しなくていいですからあ……じゅぼおっ、じゅぼおっ、じゅぼおっ」
ラウニカ「あおお……出う、出う、せーえひい、出ううう」
ラウニカ「口の中に……はふ、出して、出して、らしてえええええっ！」

ラウニカ「んんんんーっ！ んぶっっ」

ラウニカ「お、おふ……ごくっ、ごくっ、ごくっ……！」

ラウニカ「ん……ふはぁ～……あぁ、おいし。おいしいよお。数か月ぶりの精液さいこーですう……はぁぁぁぁ～っ」

ラウニカ「へ、へ、へ……うひっ。ごちそうさまでしたぁ」

ラウニカ「人間さんの精液、とってもおいしかったですう」

ラウニカ「……おやぁ？ んふふ、あれだけ出したのに、まだ人間さんのおちんぽビンビンですね？ まだまだ出せそうですね？」

ラウニカ「うえひひ、うれしいですう。私なんかの身体でそんなに興奮してくれるなんて…
…もっとごちそうしてくれるんですかぁ？」

ラウニカ「くふふ……精液、絞りがいいがありますね」

ラウニカ「いいですよ、じゃあ次は……下のおクチに、人間さんの栄養くださぁ～い」

4. 性交 ～栄養摂取大好き～

ラウニカ「うえひひ、いよいよですねえ」

ラウニカ「楽しみですか？ 私はとっても、とっても……うえひひひ」

ラウニカ「あの……アルラウネが人間みたいな上半身を持っているの、なんでだと思います
う？」

ラウニカ「本来はね、いらないんですよ？ だって花粉を受粉すれば繁殖できるんですから」

ラウニカ「人間の体があるのは……ふひっ、人間のオスを興奮させてえ、精液をもらうため
なんですよお」

ラウニカ「だから……ちゃんとアレもありますよ？」

ラウニカ「身体のお、下の方に……うえひひ……」

ラウニカ「精液を搾り取って、セックスするためだけの穴が……ここに、ほら」

ラウニカ「ん、んふ……指で開いたら……あ、蜜が垂れちゃいました」

ラウニカ「この穴におちんぽ入れたら、どれだけ気持ちいいんでしょうねえ？ んふふふ…
…」

ラウニカ「じゃあさっそく、こっちの穴でおちんぽいただきま〜す」

ラウニカ「ん、んんう……んん、おおお〜……いいっ……おちんぽいいっ」

ラウニカ「はっ……ん、ふ……んん、あふ……」

ラウニカ「入っ……たあ。ん……ふ、根本までぜーんぶ……はふう、呑み込んだじゃったあ」

ラウニカ「はあ……はあ……んんっ、私も、ちゃんと気持ちいいですよお？ 人間さんと同じ
感覚ではないかもしれませんが……」

ラウニカ「あ……んっ、精液摂取は大事なのでえ……んんっ、ちゃんと私も気持ちよくなれ
るようになってますう……うえひひ……」

ラウニカ「ふ……んふう……人間さんはどうですか？ はあ、はあ……アルラウネの穴、ち
ゃんと気持ちいいですか？」

ラウニカ「んひゃうっ！ あふあ……んん〜っ、ふー……っ。はう、ううううん」

ラウニカ「あ、お、おう……一番奥、そんなあ……あっはあ、いきなりい、ごつんって…
…はあ、ふう、それが……ああ気持ちいいんですか？」

ラウニカ「まだ、若い人間さんだと思ってましたが……ふへ、へあ、やっぱりオスなんです
ねえ……」

ラウニカ「ん、ん、いざとなったら、ケダモノみたいに……」

ラウニカ「私のこと……犯すつもりですね」

ラウニカ「へ、へ、……えへえ、えへへえ……いいですよお」

ラウニカ「アルラウネの穴……めちゃくちゃにして」

ラウニカ「んんっ……ああ、ああっ……気持ちいい……」

ラウニカ「人間さんのおちんぽお……ハメられて、気持ち良く、なっちゃう……」

ラウニカ「あんっ、んん……あああうっ。はっ、あっ、ああっ……はう、ふう、ふうう、んんっ」

ラウニカ「すごいです……こんなの……はあああっ。犯されて気持ち良くなっちゃうなんて……あ、あ、淫乱アルラウネですう」

ラウニカ「ダメ、だめえ……こんなの、こんなのおっ」

ラウニカ「ただセックスが好きなだけみたいじゃないですかあ……ううう」

ラウニカ「お腹が空いてるだけなんですう……」

ラウニカ「精液欲しくて、おちんぽ気持ち良くするために、私も興奮しちゃってるだけなんですう」

ラウニカ「んんんうーっ。ふあああっ、あ、ん、ふ……うおふ……おっほあああ……んんっ」

ラウニカ「んく、うう、う、ふ……人間に犯されてるのに、はしたない声が……出ちゃう……うう……んんふ……う」

ラウニカ「あう……ん、ごめんなさい、ああん……おっきな声、出ないように我慢しますう」

ラウニカ「ふう、ふう……んんー……ふ、ふう……ん、あ……んん、んっ、んーっ、んんーっ」

ラウニカ「は……ん……人間さん、ゆっくり動くの好きなんですか？ んー、んふー」

ラウニカ「ううう、そうやって……私を焦らして、楽しんでるんですね？」

ラウニカ「それとも……早く動いたらすぐイっちゃうの？」

ラウニカ「は……ん……ふうん……んん、あはあ……いいですよお」

ラウニカ「ゆっくりなのも……はあ、はあ、ふうん、激しいのも……お、ふ、私はあ、どっちも、好きなのでえ……あん」

ラウニカ「たっくさん擦って……えう……はあ……いっぱい気持ち良くなってえ……んー、んーっ」

ラウニカ「う……ふあ……ふあああ、ん……はっ、はあ、は、ああう……んくっ、ふあ、あ、あ、あ……」

ラウニカ「どうせ……う、ふ、ダメって言っても、するんですもんね？ はあ、はあ」

ラウニカ「なんだかんだ言っても……メスの穴につっこんだらやりたい放題なんだから」

ラウニカ「でもお……はあ、はあ、許しちゃう……おちんぽには逆らえないからあ……あっ
はあああ」

ラウニカ「無理い……気持ち良くなっちゃったら、もうだめえ……ふあああ」

ラウニカ「浅いところ……ん、ん、おちんぽの先っぽを細かく動かして……小刻みに、はあ、
はっ。う……う、んっ、んっ……ふう、ふ」

ラウニカ「はっ……あ、あはっ……あ、あはっ……ん、ん、んふっ……ふっ、あっ、ああ」

ラウニカ「うっ、ふう……ほおう……今度は、深いところまでえ……あう……あうう……っ」

ラウニカ「はあーっ、んんっ……んふー、んんっ。ほおう……んんう……はああう、ああう
ううう、はんんんっ」

ラウニカ「はあああ……うう、は、は、はあああ……んん。おちんぽ、私のナカで暴れて…
…私の弱いところ探られてますう」

ラウニカ「でもお……はあ、はあ……全部気持ちいい……全部気持ちいいのお」

ラウニカ「人間さんがいけないんですよ……夢中で腰を振って、私のこと気持ち良くする
からあ……」

ラウニカ「もっと、もっと欲しくなっちゃうんですう」

ラウニカ「ツルで二人を縛って、身体と身体をぴったり密着させて……」

ラウニカ「少し苦しいくらいがいいですよ。二人をぎゅーっと縛って、吐息も感じられる
くらいに」

ラウニカ「ん、ふ……はあ……ふ……はあ、あはあ……ん」

ラウニカ「へ、へへ……まるで、恋人みたいです。ん、ふふ……こんなに強く抱きしめあ
って」

ラウニカ「情熱的なセックスをして……はあ……ん、お互いを求めあって……」

ラウニカ「さっき会ったばかりなのに……うえへへ」

ラウニカ「動きづらいですか？ 大丈夫ですう、私がツルでお手伝いしますからあ」

ラウニカ「はーっ……はーっ……んうー、んんうー、んふー……ふう、んううう」

ラウニカ「あ……う……気持ちいい……ん、はあっ……ん、ふっ……はっ……ん」

ラウニカ「すごい……はう、んん、ふうー。私の穴のナカ、すごく熱くなって……」

ラウニカ「は、ふ、おちんぽがあ……あ、出たり入ったり……んんー、かき混ぜられてます
う」

ラウニカ「はあ……はあ……はあ……ん、んふ……は……あっ……は……あっ」

ラウニカ「あ……はう……人間さんの、おちんぽでえ……ん、ふ、気持ち良くなっちゃう
……うう、う～」

ラウニカ「ん、ふ……こんなに、きつく縛られてえ……はあ、はあう、んん、自由に動けないのに、気持ちいいなんて……」

ラウニカ「い……う、は、栄養を搾り取るためののに……こんな……はうっ……こんな気持ちよくされちゃって……」

ラウニカ「は……あう……あっ、だめ。私、もうだめっ……かも。う……はあっ……」

ラウニカ「うっ……ふううう、んっ、くううう……はあ、はあっ、うううううっ」

ラウニカ「本当に……あ、あ、もう……無理かもっ……ですっ。気持ち良すぎて……もうっ。っふあああ」

ラウニカ「あはあ……はあっ……ん、んんっ……あふあ、はあ、はふ……ううううんっ」

ラウニカ「あっ、あっ……だめだめだめ……う、んんう……ふ、うう……ああああ、だめえ」

ラウニカ「い、いやあ……イク……イカされちゃう……」

ラウニカ「人間さんも……あ、う、そろそろ、限界ですね？ んん、ふう……ふう……んんっ」

ラウニカ「んんっ……んんっ……ん、ふう、ふう……んっ、んんん、くっうう」

ラウニカ「精液、ください……精液、せーえきい……あはあ……はう」

ラウニカ「いっぱい……ちょうだい。欲しいの、あなたのせーえきい」

ラウニカ「濃い……出して？ 思いっきり、私のナカにい」

ラウニカ「はっ……はっ……ん、は。はあっ……はあっ……はあっ……ん、ふあっ」

ラウニカ「あ……くっ……ん、ふは、はあ……はあっ……ん、ん、んんんっ」

ラウニカ「あ、あ、イキそう……はっ、はっ、はっ……んんっ、イキそう、ですっ……ああっ」

ラウニカ「イクっ……もうイクっ……人間さんも、ね？ ね？ はあっ、出して、出してえっ」

ラウニカ「だめっ……もうだめっ……あっ、あっあっ、あイク……んううううっ……イクイクイクっ」

ラウニカ「んんんんんん～～～～っっ！」

ラウニカ「ん……くっ、はあっ……ふうっ……は、は、は、んく……はあはあ」

ラウニカ「はあ～、はあ～、はあ～……んふう、ふう、ふう……」

ラウニカ「はあ、はあ、はあ……あ……熱い精液、いっぱい出てる……すごい」

ラウニカ「はああ～……おいしい」

ラウニカ「はふう……おちんぼ、最高でした。ごちそうさまです。えへ」

5. 葉っぱの上で休憩 ～ツルマッサージ～

ラウニカ「あらぁ……人間さん、大丈夫ですか？ ツルの拘束を外したとたん、寝転んじゃって」

ラウニカ「セックスして疲れちゃいましたか……？」

ラウニカ「あう、ご、ごめんなさい、やりすぎちゃいましたかね？ うえひひ」

ラウニカ「でも……」

ラウニカ「とっても気持ち良かったですよ」

ラウニカ「栄養もたくさんいただきちゃいましたし」

ラウニカ「ふふ、すこし休憩しましょうか～。私も隣で横になりますね」

ラウニカ「森林浴ってやつです。気持ちいいですよ？」

ラウニカ「こうやって日向ぼっこしながらのんびりするの、私大好きなんですよぉ」

ラウニカ「横になったまま、力を抜いて……」

ラウニカ「目を閉じて、耳をすませてみてください」

ラウニカ「人間さんは今、ひとけのない、静かな自然の中にいます」

ラウニカ「この近くには小川もあるんですよ？ どうです？ 水のせせらぎ、聞こえますか？」

ラウニカ「ふふふ……そうしたら……深呼吸しましょう。息を吸って～、吐いて～。リラックスリラックス～」

ラウニカ「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ「ゆっくりでいいですからね。はい、もう一回」

ラウニカ「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ「植物の香りにはリラックス効果もありますからねえ。はい、もう一回」

ラウニカ「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ「こうして横になっているとね、ひんやりとした森の空気が、身体の火照りを冷ましてくれるんです」

ラウニカ「しっかり休んで、またたっぷり精液出してくださいね……ひひひ」

ラウニカ「おや、まだ体が硬くなってしまっている……かな？ それはいけません」

ラウニカ「うえひひ……私のツルを使ってマッサージしてみましょう……」

ラウニカ「ほうら、マッサージ、マッサージい～……」

ラウニカ「ぎゅっ……って、押して、ぎゅっ……ぎゅっ……」

ラウニカ「は……ふ……ほ……ん……ふ……ふ……」

ラウニカ「痛くないですかあ？」

ラウニカ「うまくできてるといいんですがあ」

ラウニカ「は……ふ……ほ……ん……ふ……ふ……」

ラウニカ「ちょっとは、ほぐれましたかね？　へへ」

ラウニカ「最後にもう一回、深呼吸～」

ラウニカ「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ「んんん～っ」

ラウニカ「……んふう。うえひっ、人間さん、リラックスできてますかあ？」

ラウニカ「こんな私でもお、お役に立てたらなによりですよお～♪」

6. 開花 ～花びらキレイ?～

ラウニカ「んん～……日向ぼっこ、本当に気持ちいいですねえ」

ラウニカ「こんなに太陽の光を浴びたの、本当に久しぶりなので……」

ラウニカ「……ん、んむ？ お。おお～？」

ラウニカ「おお？ これは……まさか」

ラウニカ「えへ……やっと、花が咲く……かもお？」

ラウニカ「んふ、んふ……あ、これは……くる……きちゃいますう」

ラウニカ「精液たくさん搾り取ったおかげかも……うえひへ」

ラウニカ「ふ、ふふ……んふう、私の大事なつぼみが……ゆっくり開いて……」

ラウニカ「ふああっ、んんっ……ほおお……うっ」

ラウニカ「見てえ、見てください」

ラウニカ「日の当たらない場所でも、ちゃんと栄養をとってがんばれば報われるんですっ」

ラウニカ「いいですか？ イっちゃいまいすよ？ イっちゃいますからね？ ちゃんと見てえ」

ラウニカ「私の、つぼみにい、割れ目があ……くばあって開いて、蜜が垂れちゃいますう～！」

ラウニカ「ああ、イきそう、イく、お花ひらくう……あんっ……はあんっ」

ラウニカ「……んんっ、くひいい～、んあああ～っ！」

ラウニカ「気持ちいいい～！ あっ、あああ～……」

ラウニカ「咲きましたあ」

ラウニカ「はあああん。んひ……はふう」

ラウニカ「あ、あ、すごい……私の分厚い花びらから蜜が垂れて……やあん」

ラウニカ「私のお花、中までぜんぶ丸見えで恥ずかしい、けど……この解放感、たまらなく気持ちいいですう……はふう……」

ラウニカ「あふあ♪ お花、咲きましたあ……うえひひっ」

ラウニカ「私のお花、花びら、きれいですか？ たっぷり精液もらった甲斐がありましたねえ」

ラウニカ「ああ、ちなみに、アルラウネにとっては花が生殖器なので……開花すると、性欲もマシマシになっちゃいますう」

ラウニカ「一度そうなっちゃうと、受粉するまでは落ち着かないのでえ……」

ラウニカ「んふ、んふ、人間さん……？ 私が何を言いたいのか、分かりますよねえ……うえ
へへ」

ラウニカ「たっぷりあなたで性欲処理させてもらいますねえ……ひひひ」

7. 二回戦 ～青空の下でセックス～

ラウニカ「さあ、さあさあ人間さんっ」

ラウニカ「太陽の光をいっぱい浴びながら、解放感たっぷりの中でセックスしましょうか～」

ラウニカ「ふえひっ、人間さんも、もう準備万端のようですねえっ？」

ラウニカ「そりゃそうですよねえ？ この辺り一帯には、媚薬効果のある私の花粉がたっぷり舞ってるんですから」

ラウニカ「そんな場所で、さっきみたいにたくさん深呼吸なんてしてたら……そりゃあ、ねえ？」

ラウニカ「えへ、へへへ……うえひっ」

ラウニカ「あのお……へ、へ、へ……私い、普段はこんなですけど……本当はね……」

ラウニカ「セックス大好きなんですよお……」

ラウニカ「ふへ、えへ、バレちゃってました？ だってえ、精液って栄養豊富で美味しいんですもん……」

ラウニカ「花も咲きましたし、もっともっとがんばりますからあ。人間さんの精液、もっと、た～っぷり飲みたいんですう」

ラウニカ「いいですよね？ ね？ ね？ 私とセックス、ね？」

ラウニカ「一緒に気持ち良くなりましょ♪」

ラウニカ「まずは私の上のおクチで」

ラウニカ「ああ～ん、んむ」

ラウニカ「じゅぶ……じゅる、じゅるるるっ……」

ラウニカ「もう固くなってるじゃないですかあ。おクチでする必要なかったですかね？ うえひひひ」

ラウニカ「えるれうれう……んふう、はあ……ちゅるちゅるちゅる」

ラウニカ「んんっ、我慢汁も美味しっ。んっ、んっ……じゅぼ、じゅる……」

ラウニカ「じゅろろろろ……ん、はふ、はあ、はあっ……んふお……じゅぶ……じゅぶ……じゅぶ」

ラウニカ「んふう～。んふう～。……じゅぶ……じゅぶ……じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ」

ラウニカ「ぢるるるる……ふはあっ。はあ、はふ……ん」

ラウニカ「おちんぽも、玉の入った袋もお……柔らかい葉っぱで包んで、さわさわ～って」

ラウニカ「新芽の柔らかい葉っぱで、すりすり、すりすり」

ラウニカ「んふ、気持ち良さそうですね。うれしいです。もっとしちゃいますね」
ラウニカ「すり、すり……ん、はふ……すり、すり……」
ラウニカ「ぬるぬるで蜜たっぷりの舌で……れろれろれろ……」
ラウニカ「しゅり……しゅり……しゅり……」
ラウニカ「べったり張り付いた葉っぱの、葉脈のわずかな凹凸がいい摩擦になって気持ち良くないですか？」
ラウニカ「手コキならぬ、葉コキですう……うえへへえ」

ラウニカ「しゅり、しゅり、しゅり、しゅり、しゅり……」
ラウニカ「あはあ♪ ……生まれたばかりの純潔の葉っぱが、人間さんの我慢汁を浴びて喜んでますよお……うえひひっ」
ラウニカ「おちんぼの先端が膨れてパンパン……おいしそ」
ラウニカ「んああああ………はんむっ。じゅるろっ……ぢるう……」
ラウニカ「じゅぼっ、ぢゅゅうぼっ……えあ、ふ……じゅるろっ、じゅるろっ……はふ、ん」
ラウニカ「先っぽ舐めながら、葉っぱでも擦って……」
ラウニカ「へあ……んむ、じゅろる、んふう……じゅるるる、おふう……」
ラウニカ「じゅろる、じゅろる、じゅろる、じゅろる、じゅろる」
ラウニカ「はあ、はあ、はあ……ん、ふう」
ラウニカ「すごいですよお、人間さんのおちんぼ」
ラウニカ「こんなにたくましいおちんぼで私の穴をかき回されたら、おかしくなっちゃうかも」

ラウニカ「こんなの初めてですか？ 慣れてない刺激でもうイっちゃいそうですか？」
ラウニカ「まだ……だあめえ」
ラウニカ「せっかくの体験なんですから、もっと我慢してください」
ラウニカ「はあーん……む、ろろろろる。んふ、はうむ、にゅろろろろ」
ラウニカ「ん……ぶはあっ、もういいですかねえ？」
ラウニカ「っていうか……その、私のほうが我慢できないのでえ……私の穴に、私のナカに、たっぷり人間さんの精液出してください」

ラウニカ「えと……人間さんは、そこに横になっていてください」
ラウニカ「私が上に乗って、好きなように腰を振るので……うえへへ」
ラウニカ「おちんぼ、入れちゃいますね……」

ラウニカ「ん……ふううう……あ、ああ……ふあああっ」
ラウニカ「あんっ、すご、かったあ～いっ……♪」

ラウニカ「もう、私、さっきみたいに……っ。声、我慢できませんからあ」

ラウニカ「太陽の下で、ぜんぶさらけだして、気持ち良くなっちゃいますからあ」

ラウニカ「ん、はああう……ん……は……お、おあん」

ラウニカ「そっちの方が……気持ちいいもん。思いっきりい、気持ち良くなりたいですう」

ラウニカ「突いて……ああんっ……。そう、奥まで……あ、あ、抜く時に、私のナカが擦られて……ふうううん」

ラウニカ「また……突いてっ……ひゃああん。気持ちいい……それ、繰り返して……」

ラウニカ「ふああっ……ん、ふ、おうううう……ん。ああああっ……は、はふ、んうううううう」

ラウニカ「えう……人間さんのおちんぼ、気持ちいい……あんんっ！」

ラウニカ「は、は、んんんううう……うう、はあうっ……ん、あああああああはあ」

ラウニカ「奥……ふああっ……ん、んん、すごっ……うあああああああ」

ラウニカ「っふ、ふうっ……んんっ……んはっ、ふう、んはあああああ」

ラウニカ「えう……気持ちいいよお……んううっ……ふ、ふ、ああああああっ」

ラウニカ「はううう、身体の芯から、ぞくぞくくる……」

ラウニカ「今、光合成しまくってるのでえ……んふふ、見てください。おっぱいからも蜜がぴゅっぴゅって出ちゃいますよお」

ラウニカ「ほらほら、飲んでえ。いっぱい蜜飲んでくださあい？ その栄養で、またたっぷり精液作ってくださいねえ？」

ラウニカ「あんっ。少し揉むだけで乳首から蜜が垂れてきちゃう……」

ラウニカ「もったいないですよ、ほら……舐めてえ？」

ラウニカ「あ、ああ……ん。ちっちゃい舌で、ぺろぺろ……小刻みに動かして……はふう」

ラウニカ「おっぱいの蜜、おいしいですかあ？」

ラウニカ「ふうんっ……ああ、どんどん出てきちゃう。ああ、こぼれちゃいます」

ラウニカ「吸って……ね？ 乳首吸って？」

ラウニカ「んあう！ あ、あ、吸われてる。ぴんぴんに膨らんだ乳首……」

ラウニカ「唇でやさしく挟んで、ちゅうちゅう……うう、んんう」

ラウニカ「くふう……おちんぼ入れながら、おっぱい吸うのに夢中になって……」

ラウニカ「う……へう……はあ、はあ、ん……はあああん」

ラウニカ「あんっ、すごっ……んああっ、おちんぼがあ……ますます硬くなってますう」

ラウニカ「うえへへ……動くの私にばかりまかせてたらダメですう。人間さんのおちんぼ最高なんだから、もっと強引に突いてくれないと」

ラウニカ「んふふ……覚悟してくださいね？」

ラウニカ「こうですよ……こうっ！ ふあああっ！ ん、んふ、ふあああああっ」

ラウニカ「ほらほら、私のお、精液絞りとるためだけの穴、もっと突いてえ……激しくっ」

ラウニカ「あんっ、あんっ、あんっ！ ふは、は、もっと、もっとお……」

ラウニカ「ふあっ……おっ、はううっ！ んあっ、ああっ、んくうっ！」

ラウニカ「へあっ、はああっ、はああっ、はああっ、はあああっ！」

ラウニカ「ああっ、はげしっ！ うあっ、んああっ、はっ、はっ、はあああっ！」

ラウニカ「ん、は、人間さんも、気持ちいいですか？」

ラウニカ「んひゅう……くうう！ おふ、ふおお、んんんお」

ラウニカ「はあ、はあ、アルラウネみたいな、ザコモンスター、どうとでもできるなんて思
ってました？」

ラウニカ「う、ううっ……んあ、んお、おっく、くう……ふああっ」

ラウニカ「やるだけやったらあ、切るなり焼くなりしちゃえばいいって、ん、ふ、思っ
てました？」

ラウニカ「へ、へあ……あふ、ふんっ、んんんっ……お、おお、おふ……ふうー、ふうー、
ふうーっ」

ラウニカ「あ……あ……植物のモンスターなんて動けないし、すぐ逃げられるとでも思っ
てましたかあ？」

ラウニカ「ざあ～んねん♪ 一度根を張った植物はしぶといんですよ」

ラウニカ「絶対に逃げられません。逃がしません」

ラウニカ「このおちんぽと栄養は、ぜえ～んぶ私のものです♪」

ラウニカ「えへ……人間さんだって、本当はもう拒否なんてできませんよねえ？」

ラウニカ「あ、あん……ん、あ、あ、……あん、あんんう」

ラウニカ「んふ、んふ、アルラウネの穴に、おちんぽ入れて気持ち良くなっちゃってますよ
ねえ？」

ラウニカ「へ……あへあ……あ、う、ううん……は、あ、あん」

ラウニカ「イキそうになっちゃってますよねえっ？」

ラウニカ「えへ、へへえ……へうっ、ん、んぐっ、はあっ、はあっ、ああっ、あああっ」

ラウニカ「じゃあ、イっちゃいましょうかあ……はふう」

ラウニカ「ふう、ふう……あんっ、あっ、あっ、ふ……はっ、あ、あんっ、あんっ！」

ラウニカ「ふあっ、すごっ……ぎもち、いいっ！ あっ、んくうあっ、んふっ、んふっ」

ラウニカ「んぐっ、んぎ、ぎもち、ぎもちいいよお……はあっ、んぐっ、んんっ、ああっ、
あああっ」

ラウニカ「あああああだめえ……だめえっ、お花がっ……受粉したくて、勝手に花粉ばら
撒いちゃいますう」

ラウニカ「勝手に、動いちゃう、花粉撒いちゃうう……止まらないっ……あああああっ」

/ラウニカ「いやあ、繁殖したくて、発情しちゃってるのバレちゃうう」

ラウニカ「恥ずかしいのに、止まらないっ……んっああああああっ」

ラウニカ「あああああっ……あああああっ、ん、んん、んんんんっ」

ラウニカ「は、は、はっ、はっ、はあっ、はあっ！ 人間さん、人間さんっ」

ラウニカ「も、私っ……おかしくなっちゃってるのにつ、うあああっ」

ラウニカ「そんな、そんなに激しくしたらあっ」

ラウニカ「わだしっ、もっ、むりいっ！ あっ、あっ！ むりいっ」

ラウニカ「んんっ、だめえっ、はっ、はああっ、はああっ、だめえ」

ラウニカ「いっ……イクっ……イっちゃうっ……あっ、はっ、はっ」

ラウニカ「ああんっ、んんっ、私っ、イきますからあっ」

ラウニカ「人間さんもっ、新鮮な精液た〜っぷり出してっ？ ああっ、ああっ、あああっ」

ラウニカ「極上の精液でえ、た〜っぷり気持ちよくさせてくだしゃいっ……あんっ、んあ
っ！」

ラウニカ「もう無理っ、もうっ、うああっ、うああっ、うあああっ、無理っ、無理いいい」

ラウニカ「イクイクイクっ！」

ラウニカ「『あああああああ〜〜〜〜』」

ラウニカ「ん、ほおおっ……まだ、ダメっ！ やだ、やめちゃ、やだっ！ やめちゃやだあ
っ」

ラウニカ「ふあっ、もっとなっ！ もっとなっ！」

ラウニカ「めちゃくちゃにっ！ おかしくなるまでっ」

ラウニカ「ほおうっ、んおおうっ、あああぐっ、んぎいいい、んぐうううう」

ラウニカ「またイクっ、すぐイっちゃうっ」

ラウニカ「ダメダメダメダメっ」

ラウニカ「んんんんん〜〜〜〜っ！」

ラウニカ「あああああああ、イってる、イってるっ」
ラウニカ「止まんないっ……あああっ、イクの止まんないっ」
ラウニカ「はっ、はっ……ずっと、痙攣してるっ……んっ、はっ、うっ」
ラウニカ「まだっ、まだあ……このままっ、もっと、気持ちいいっの、全部、出してえっ」
ラウニカ「イキたい、イキたいのっ、あなたのおちんぽで、もっとイかせてえっ」
ラウニカ「ふああああっ！ イってる、のにい……もっと大きい、クるっ！」
ラウニカ「あああああああっ！ イクっ！ イクっ！ イっちゃううううう！」
ラウニカ「ああはあああああああああっ！」

ラウニカ「あ、あ………っっ！ かつ、はっ……くっ……ふ……ふひっ、ひっ、ふっ……
はっ、は、はふ……ん、んん……うう」
ラウニカ「う、ふ……ひう……ん、ふう……」
ラウニカ「はあ、はあ……ああ、んんあ……うえひひひ。気持ち良かったあ」

ラウニカ「はあ……って……あ、あの、その」
ラウニカ「す、すみません、開花の興奮でつい……夢中になってしましまして……」
ラウニカ「ううう……恥ずかしいですう……」
ラウニカ「でも……」
ラウニカ「最高のおちんぽ……この養分、ぜ～ったいに逃がしませんよぉ……♪」

8. 【ルート分岐】質問 ～どんな養分になりたい?～

ラウニカ「ふひっ、人間さん、最高の養分ですねえ。精液の質はいいし、何回でもできるし……」

ラウニカ「あの一、そこで……なんですけどぉ……」

ラウニカ「あ、いや！ やっぱいいです」

ラウニカ「……………え？ あ一、うん……そうですね、そこまで言われたら気になりますよね？」

ラウニカ「むしろ、気をつかってそっちから聞いてほしいみたいな感じになっちゃいますよね」

ラウニカ「うざいですよね……そうですね、面倒くさいですよね……あはは」

ラウニカ「あっ、はい！ 言います言います！」

ラウニカ「えっと、そのぉ……」

ラウニカ「あの……で、できればなんですけどぉ、このまま、私と暮らしませんかぁ？」

ラウニカ「また日光がさえぎられちゃうと困っちゃうし……」

ラウニカ「私は動けないから、ずっと人間さんが側にいてくれば、邪魔な枝葉を落としてもらえて助かるなあって……」

ラウニカ「あう……でもぉ……こんなじめじめしたアルラウネは……やっぱりイヤですかねえ」

ラウニカ「ああ、ううう……。たしかに、日当たりのいいあっちの方には、明るいキラキラのアルラウネたちがたくさんいるみたいですけどぉ……」

ラウニカ「あのコたち、本当に頭の中までお花畑だし、いっぱい花を咲かせるから害虫も寄ってくるし、あと葉っぱの色濃すぎ。色素薄めの方がかわいいと思いませんか？ 直射日光浴びすぎて葉やけども起こしちゃえばいいんです」

ラウニカ「べ、べつに、うらやましくないですけどねっ」

ラウニカ「それに……それにですよ？ 本当にあっちはダメなんですよぉ？」

ラウニカ「栄養が足りてるから、あのコたち精液とか要らないんですう。人間は絞め殺してすぐ土に埋めちゃうようなヤツらなんですから……ホントですよぉ？ あと葉っぱの色濃すぎ」

ラウニカ「……………あ、それともぉ……もしかしてそっちの方が好みですかぁ？」

ラウニカ「うえへへ……ほら、見てくださあい」

ラウニカ「このでっかいウツボカズラ。人も丸ごと呑み込めちゃいますよぉ……？　うゑへへっ」

ラウニカ「へ……へ……すごいでしょ？　んふ、これも私の一部でしてゑ。人間が入ったら、じっくり溶かして、養分にしちゃうわけなんですが……」

ラウニカ「土に埋められて腐っていくより、こっちで食べられる方が幾分かマシかなーって……丸呑み願望とか、あったりしますう？」

ラウニカ「へ、へ、へ……ふふ、ふひっ、ひひひ」

ラウニカ「と、とりあえずう、人間さんを逃がしたくないのでゑ……」

ラウニカ「このまま私のお世話をしながら精液を出し続けるか……」

ラウニカ「肉も骨もぜーんぶ溶かされるか……」

ラウニカ「どのみち私の養分になるのは変わらないのでゑ……好きな方、選んでいただけると……うゑひっ、うゑひひ」

9a. 【お世話ルート】手コキ葉コキ連続セックス ～お世話したりされたり～

ラウニカ「もうすぐ朝日が昇りますかねえ……」

ラウニカ「ふふっ、人間さん、疲れて寝てますね」

ラウニカ「私のお世話をしてくれるって言ってたけど……本当に私なんかで良かったのかな……？」

ラウニカ「本当はもっと明るくてかわいいアルラウネの方が良かったんじゃない……」

ラウニカ「ううう……そりゃあ、私だって……」

ラウニカ「私も日向のアルラウネみたいに派手な色の花を咲かせてキラキラに……」

ラウニカ「ん、んんっ……」

ラウニカ「こんにちはっ！ アルラウネのラウニカちゃんだよ！ あはっ！」

ウニカ「……………無理い。絶対無理。私みたいに根っこが腐ったやつとは住む世界が違うんだ……」

ラウニカ「ひええええっ！」

ラウニカ「いつから目が覚めてたんですか！」

ラウニカ「あの、その、こっそり見てるなんて卑怯ですよ……私が言うのもなんですが……」

ラウニカ「はあ……。まだ暗いのに、早起きなんですねえ」

ラウニカ「私？ 私は、その……人間さんが枝を払ってくれたあそこから、朝日が昇ってくるのがもう楽しみで楽しみで」

ラウニカ「私もまだ暗い内から目が覚めてしまいました」

ラウニカ「……日の出前のこの時間が一番静かです。樹海は昼も夜も騒々しいですからねえ」

ラウニカ「うえひひ、どうですかあ？ 私のお世話する生活には慣れましたか？」

ラウニカ「け、結構悪くないと思いますよぉ？」

ラウニカ「私の蜜や果実で、食べ物には困らないし、一応、香りとかで癒したりも……♪」

ラウニカ「あなたは私に養分を提供するだけでいいですしい……」

ラウニカ「あ、地面に埋めたキミの排泄物も、土に返って、ちゃーんと私の栄養になっていますのでえ……」

ラウニカ「ああ、日当たりにだけは気を付けてくださいねえ」

ラウニカ「光合成をしないと、栄養不足になって……非常食に手を出さないといけなくなりますからあ」

ラウニカ「え？ あ、ひ、ふひっ。そうです、非常食はあなたのことですう……んふ」

ラウニカ「た、食べませんよ？ 今は、ね……？ うえへへ」

ラウニカ「と、とりあえず、今日の朝ごはんの精液をいただきますねえ。よ、よろしくをお願いしますう」

ラウニカ「え？ また葉っぱで擦ってほしいんですか？」

ラウニカ「しょーがないおちんぽですねえ」

ラウニカ「私が相手してあげないと、気持ち良く射精もできないんですから」

ラウニカ「んふふ……そんなにシてほしいなら、いいですよお」

ラウニカ「どうせー、二回出したくらいじゃ勃起は収まらないでしょうし」

ラウニカ「人間さんの耳元でささやきながら、手コキと葉コキで精液搾り取っちゃいますう」

ラウニカ「ん……は……はあ……あ……あはあ」

ラウニカ「おちんぽを……ぎゅ、て握って」

ラウニカ「最初はゆっくりですよね……しゅうり……しゅうり……しゅうり……これくらいですか？」

ラウニカ「ふふ、おちんぽを柔らかい葉っぱで包むように握って、上下に動かして……」

ラウニカ「は……ん……ふ……あ……はあ……はあ……んふふ」

ラウニカ「気持ち、いいの？」

ラウニカ「あ、これ……我慢汁。もう出てきちゃいました？ んふふ」

ラウニカ「しゅうり……しゅうり……しゅうり……しゅうり……」

ラウニカ「ん？ ふふ、なんですかあ？ もう少し早く？」

ラウニカ「えと、どうしよう……しゅうり、しゅうり、しゅうり、しゅうり」

ラウニカ「これくらい？ ふふ、いい感じですか？」

ラウニカ「私の葉っぱ、気持ちいい、ですか？ しゅうり、しゅうり、しゅうり……って擦られて、気持ち良くなっちゃってます？」

ラウニカ「ああ……はあ……はあ……ん……ふ……はああ……」

ラウニカ「私も楽しいですよ？ 人間さんのおちんぽいじるの」

ラウニカ「ぴくぴく反応してかわいいです」

ラウニカ「あ、はい……もうちょっと力を入れてほしいんですね？ んふふ、我が儘さんですなえ」

ラウニカ「じゃあ……少しだけ、ぎゅ、ってして……しゅり、しゅり、しゅり……って、どう？」

ラウニカ「ん……ん……あ……はあ……あ……はあ……ん」

ラウニカ「あれ、もしかして……もうイキそうになってます？」

ラウニカ「ええ……？ まだだめですよお……これからじゃないですかあ」

ラウニカ「はい、我慢、我慢」

ラウニカ「はあ……はあ……はあ……ん、んん……はあ……はあ……ああ、あはあ」

ラウニカ「ふふ……私の葉っぱと、私の手で、そんなに気持ち良くなってくれるんだあ」

ラウニカ「でもお……これじゃあ、どっちがお世話してるのか分からないですねえ」

ラウニカ「人間さんは、私のお世話してくれるんじゃないんですかあ？」

ラウニカ「なのに、おちんぼ気持ちよくさせられちゃって……」

ラウニカ「とってもかたくて……葉っぱごしにも熱くなってるのわかりますよ？」

ラウニカ「はあ……はあ……あと何回しゅりしゅりしたらイっちゃいますかねえ」

ラウニカ「まだダメですよお……私がいいって言うまで」

ラウニカ「限界まで我慢してから、どぴゅ～って出しましょうねえ」

ラウニカ「あ……ん……ん……はあ……あ……ん……ん、あ……」

ラウニカ「もう無理ですか？ 出ちゃいそう？」

ラウニカ「じゃあ……ん……あ……え、どうしようかな、んふ」

ラウニカ「え？ほんとに無理？ ん～……う……は……ああ」

ラウニカ「葉っぱと手でしゅりしゅりされるの、そんなに気持ちいいんですか？」

ラウニカ「ふふっ……しゅりしゅりしゅりしゅりしゅり」

ラウニカ「じゃああ……みつつ数えたら、イっていいことにしましょう」

ラウニカ「さ～ん……ん……はあ……」

ラウニカ「ああ、イっちゃいそ、イっちゃいそ……だめだめ。だあめ」

ラウニカ「にい～い……んふ……ふ、はあ……あ」

ラウニカ「いい～ち………は、は、あ、あ、あ、あ」

ラウニカ「ん～……ぜろっ」

ラウニカ「わああ～。んふふ……いっぱい出ましたね」

ラウニカ「気持ち良かったですか？」

ラウニカ「でも、これで終わりじゃないですからね」

ラウニカ「次は、このおちんぼと精液、私のナカに入れてくださいね」

ラウニカ「今度は……人間さんが私のお世話をする番なんですから、人間さんが上になってください」

ラウニカ「が、がんばって腰を振ってくださいね……んふ、うえへへ」

ラウニカ「さあ、どうぞ……」

/ウニカ「おちんぼ、入れてくださあい」

ラウニカ「ふうっ……んんんーっ」

ラウニカ「……くっ……はぁっ……気持ちいい……」

ラウニカ「あ、あ……おちんぽ入っただけで、私の穴から蜜があふれてます」

ラウニカ「すごい……ふふっ」

ラウニカ「……はぁ、はぁ、はぁ……人間さん？ あの……どうしました？ 動いてください」

ラウニカ「私のナカの感触を堪能してるんですか？」

ラウニカ「うえへへ……そう言われると、悪い気はしないんですがぁ……」

ラウニカ「で、でも、私も……その、もっと気持ち良くなりたいのでえ……」

ラウニカ「早く動いてもらえませんか……へ、へ、人間さんのおちんぽで、かきまわして……」

ラウニカ「ふうぁっ……あ、ああ、そう、そうですう……」

ラウニカ「あふんっ、ふううう……あ、あう……ひいやんっ……ふ、はううう」

ラウニカ「あ……それ、それえ……ぁ気持ちいい」

ラウニカ「う、やば……うん、あ、あ、そこ、いいです、そこ、そこぉ……」

ラウニカ「そこ好きぃ……気持ち、いい……あはあう……気持ちいいい」

ラウニカ「はぁあうっ……私の、気持ちいいところばっか突いて……」

ラウニカ「うううん！ ん、ん、はぁうっ……さすが、私のお世話係ですう」

ラウニカ「あん、あん……んふ、ふううう、んううううっ」

ラウニカ「……あ……っ、ん、う……すごい、すごいですっ」

ラウニカ「ああへあ……う、うふう……ん、ふぉ……つくう……んんっ」

ラウニカ「ん、んふう……おいしい精液、出すだけじゃなくって……は、ん、こんなに気持ちいいなんて……ぁっ」

ラウニカ「おちんぽ好きぃ……おちんぽ大好きいい……」

ラウニカ「んんふう……ふーっ、ふーっ、ふーっ……んんんっ」

ラウニカ「私のアソコ……勝手におちんぽ締め付けちゃう……精液欲しくて、搾り取ろうとして……はっ、ぁっ、んんう」

ラウニカ「ふうーっ、ううう、ううううう……んんんっ」

ラウニカ「へ、へ……私い……太陽の光よりも、こっちの方が好きかもぉ……おふう……うぁぁぁ」

ラウニカ「おちんぽがあれば、もうなんでもいいかもぉ……っ」

ラウニカ「ひぁぁぁぁ、ん、ん……うう、ふぁぁぁぁぁぁっ」

ラウニカ「あ、あうう……シて、もっといっぱいシて……めちゃくちゃにしたいですからぁっ」

ラウニカ「はああああううっ……んっ、うんっ、うん、うああ……はああああう」

ラウニカ「あっ、あっ、あっ、あっ、はげし、はげしい」

ラウニカ「気持ちっ……気持ちいいっ！」

ラウニカ「うあああああああっ……いい、いいですっ、もっとな、もっとな！」

ラウニカ「あへあああああ、んんん、んふーっ、ううううう」

ラウニカ「いあああああ、い、いいいいいいっ……んくっ、ううううう」

ラウニカ「もっど、づいでええ……えあああああっ」

ラウニカ「うーっ、ううううっ！ ふううっ、うあああああっ」

ラウニカ「ふっ、あっ……もうだめ……あっ」

ラウニカ「きちゃう……だめ、すっごいの、きちゃうううう」

ラウニカ「イック……はっ、はっ、はっ……イっく、イっくううう」

ラウニカ「もうだめもうだめもうだめえ……えええあああだめええっ！」

ラウニカ「だめえイクううううう」

ラウニカ「あああああああああああああっっ」

ラウニカ「はっ……ん、んんう……はううう」

ラウニカ「たまらない……たまらないんですう！」

ラウニカ「人間さんの精液を吸い取って、身体中に巡っていく感じ……っ」

ラウニカ「細い葉脈の一本一本までえっ……人間さんの栄養が染み込んでいく感じっ」

ラウニカ「ああああああ……幸せですう」

ラウニカ「ふああああああっ……ん、んん……もう一回、出ますか？」

ラウニカ「あ、あ、うううんん……朝から、精液のおかわりっ」

ラウニカ「んああああああっ……は、は、ふっ……うううううううっ」

ラウニカ「あああああっ、あああああっ、私もっ……すぐっ」

ラウニカ「また、またあ……イック、イグう……」

ラウニカ「気持ちいい、気持ちいい……」

ラウニカ「イっちゃう……うううう、も、だめ……はああああああっ」

ラウニカ「だめだめっ……ふああああああっ、あああああんっ」

ラウニカ「ほんとに、イキますっ……イキますよっ……」

ラウニカ「イクっ、イクっ、イっちゃううううう」

ラウニカ「あああああああああああああっ」

ラウニカ「はあーっ、はあーっ、はあーっ、はあーっ……んっ」

ラウニカ「は、ふう……ごちそうさまですう……今日も、おいしいです」

ラウニカ「人間さんの精液が出る限り、おちんぼのお世話は私がしてあげますから」
ラウニカ「私の身の周りのお世話も、よろしくお願いしますね……うえへっ」

9b. 【丸呑みルート】 ウツボカズラの中へ ～身体すべてを養分に～

ラウニカ「ああっ、そ、そうですかぁ？」

ラウニカ「直接栄養に……？ 分かりましたぁ」

ラウニカ「うえへへへえ……。う、うれしいですう。助かりますう！」

ラウニカ「じゃあ……うん、そうですね。早速……いただきちゃいますねえ」

ラウニカ「ではでは、ウツボカズラをこちらに……よいしょ、っと」

ラウニカ「はい、この中でえ、人間さんをどろどろに溶かして、栄養にしちゃいますうう…
…」

ラウニカ「あ、このウツボカズラはですね、私と繋がっていて、私の身体の一部ですから…
…」

ラウニカ「人間さんはこれから私とひとつになるってことなんですねえ……へ、へ、へへ」

ラウニカ「あ……でも多分、このまま突っ込んだらすっごく痛いのでえ……」

ラウニカ「えっと～、まずは、蜜と花粉を流し込んで、麻酔代わりにしてあげますねえ？」

ラウニカ「そ、そしたら……私とちゅーしましょ。いってらっしゃいのちゅーです。うえへ
ひっ」

ラウニカ「は～い、甘くていい香りの私の蜜をお、た～っぷり飲んでくださいね……」

ラウニカ「ん……ちゅ、むちゅっ、あんっ……ほら、飲めば飲むほど頭がぼーっとしてきた
でしょ……？」

ラウニカ「うえひひ、目の焦点があわなくなってきましたね」

ラウニカ「力が入らなくて、ぐったりしちゃってますねえ」

ラウニカ「うんうん、じゃあこのままツルで人間さんをお……袋の中に……」

ラウニカ「ではでは人間さん、いただきま～す」

ラウニカ「よい、っしょ……っと」

ラウニカ「ウツボカズラのクチを大きく開けて……」

ラウニカ「あああ～～ん……って」

ラウニカ「あれ……おかしいな、ひっかかっちゃいました？」

ラウニカ「人間さんをいただくのはひさしぶりだったので……えへ、えへ」

ラウニカ「う……ど、どうしょ。そうだ、ツルで少し押し込んでっど……」

ラウニカ「うーん、うまく入っていかないですねえ」

ラウニカ「んー、んん〜？　なんか引っかかっちゃってるみたいなのでえ……」

ラウニカ「ウツボカズラの内側からもっと粘液出して、滑りやすくしましょうかぁ」

ラウニカ「途中で引っかかっちゃったせいで、人間さん、私のウツボカズラから顔だけ出て
る……へへ、へへへ」

ラウニカ「いや、笑ってる場合じゃないですね。ど、どうしよう……」

ラウニカ「普段はこんなことしないんですけど……」

ラウニカ「ウツボカズラ自体を少し動かしてみしましょうか」

ラウニカ「袋をツルでぐるぐるに巻いたら、波打つように、絞るように動かして……」

ラウニカ「ん……ん……ん……ん……」

ラウニカ「まるでヘビが獲物を丸呑みしてるみたいですね」

ラウニカ「少しずつ……下へ、下へ、落ちていきますよ」

ラウニカ「うん……うん……うん……」

ラウニカ「お、お？　いけそうですね？」

ラウニカ「あとちょっと……ん、んっ……ウツボカズラに、落ちちゃえ、落ちちゃえ……」

ラウニカ「あと一息っ……」

ラウニカ「んふふ、ゆっくり味わわせてもらいますからね？」

ラウニカ「最後は一気に……は〜い、どっぽん……♪」

ラウニカ「私のウツボカズラ、ぱんぱんですう」

ラウニカ「うえひひっ、そこも私のお腹の中みたいなものですから」

ラウニカ「人間さん？　ほら、こっちですよ？」

ラウニカ「上から覗いている私が見えますか？」

ラウニカ「うえへ……ふへへ、そんな不安そうな目で見上げないでください……」

ラウニカ「私のお腹の中でゆっくり溶けていく人間さん、かわいい……なんて愛らしいんで
しょう」

ラウニカ「その溶解液も、もちろん私の体液なのですが……」

ラウニカ「まるでお風呂にでも入ってるみたいですね」

ラウニカ「その液につかってのんびりしていれば、じきに身体が溶けていきますので」

ラウニカ「麻酔の効果で動けないでしょうけど、そのままゆらゆらしてれば、自然に養分になれますからねえ」

ラウニカ「そうですねえ……あなたくらい人間さんがゼーんぶ溶けちゃうまで……うー
ん、5時間？　6時間くらいですかねえ」

ラウニカ「ああ……人間さんが溶けて、私の身体に染み込んでいく……」

ラウニカ「アルラウネにとって至福の時間ですう……」

ラウニカ「完全に溶けてなくなるまで、上からずっと眺めていてあげますからね……うゑひひ」

ラウニカ「人間さんのこと、ぜーんぶ余さず栄養にさせていただきますのでえ……遠慮なく溶かされちゃってください」

ラウニカ「気前よく私の養分になってくれたことはあ、私、決して忘れますのでえ……うゑひひひひ」

ラウニカ「人間さんの養分が私の身体に行き渡って……」

ラウニカ「やがて、またキレイな花を咲かせますよ、ふふふ」

(END)